

2020年4月号 No.357



表紙 「桜 五分咲き」(木場公園) 2016年4月11日

桜を描こうと思ったら2月のデッサンが重要になる。
桜が咲く前に、枝ぶりを手や頭にたたきこむ。

森 孝之 [東京三組 福成寺門徒]

昭和37年、東京都江東区深川に生まれる。
美術学校や画家に師事することなく水彩による風景画にのめりこむ。
以来30年あまり水彩画の奥深さにとりつかれ現在にいたる。
公募展に出展することもなく、現場で描く事を楽しんでいる。

東京教区教化委員会報 ネットワークナイン

発行日 2020年4月1日
編集 教化委員会広報・出版部門
発行 真宗大谷派東京教区教化委員会
〒177-0032 練馬区谷原1-3-7 東本願寺真宗会館
TEL. 03-5393-0810 FAX. 03-5393-0814 Email. nw9@ji-n.net

もくじ

●03 特集 教区報恩講法話① 海 法龍

●11 法語ポスター

●12 特集 教区報恩講法話② 中津 功

●13 特集 教区報恩講法話③ 藤井 義信

教区教化通信 総合調整総務会

教区同朋大会開催中止の

●15 お知らせ

教区教化通信 教学館

●16 私の出遇った言葉 長尾 朋聡

教区教化通信 「同和」協議会

教学者は「是旃陀羅」問題に

●17 己の血を流せ！④ 岩寄 徹

教区教化通信 大谷保育協会

●18 子育ての大地 舟生 美香

組の現場から 東京1組

●19 住職寺族研修会 内藤 友樹

はい！こちら真宗会館です

●20 駐在日記 佐々木 弘明

はい！こちら真宗会館です

●21 所員のつぶやき 北島 昭彦

●23 敬弔・涌 田宮 真人

2020年



東京教区 報恩講

テーマ：今、いのちがあなたを生きている
人にであう 教えにであう 自分にであう

2020年

東京教区 報恩講

法話 ダイジエスト

法話講師

速夜・日中

海法龍氏

(三浦組 長願寺住職)

帰敬式

中津功氏

(親鸞仏教センター 雇員)

晨朝

藤井義信氏

(長野5組 専念寺候補衆徒)

1月26、28日に厳修されました教区報恩講において、3人の講師の方がお話しされた内容をダイジエストにして掲載いたします。



報恩講法話

〔1月27・28日〕

海かい法ほう龍りゅう氏し（三浦組長願寺）
ちようがんじ

報恩講とは

今日は東京教区の親鸞聖人御正忌報恩講です。最初に報恩講のおこころについて、皆さんと一緒に尋ねて参りたいと思います。昨日は帰敬式、そして今日はお速夜。そして明日がご満座ということでございます。3日間にわたってこの東京教区の報恩講、ご住職方、坊守さま、寺族の方々、ご門徒の皆さん、そして真宗会館の職員の皆さんのご協力の中で、この報恩講が勤められています。19日には仏具のおみがきがございましたのでお荘厳がとも輝いています。私たちが一堂に会して、手間ひまをかけてお勤めするのが、報恩講の本来の姿です。

11月21日から28日。私たちのご本山、

真宗本廟、東本願寺の報恩講です。一週間、お勤めされています。それも、お彼岸よりもお盆よりも永代経よりも、何よりも大事にして丁寧に重く勤められています。この報恩講を勤めるために、真宗の道場としてのお寺が建立されていた、と言つて良いと思います。暁あけ鳥からす敏はや先生は「365日、一日として報恩の日で無いのではない。毎日が報恩講である」とおっしゃいました。安田理深やすだりしん先生も同じことを言っておられます。報恩講の精神において年忌法要をお勤めし、報恩講の精神においてお通夜・お葬儀をお勤めする。報恩講の精神においてお墓参りをする。報恩講の精神において各種のお寺の行事があり、日常のお内仏でのお参りがある。私たちの仏事の根底は報恩講なのです。ではその報恩講という仏事とは何なのか。それは親鸞聖人のご法事です。このご法事を毎年お勤めしてきました。祥月命日が11月28日です。親鸞聖人が亡くなったのが1262年、弘長2年です。90年のご生涯を閉じていかれました。その親鸞聖人のご生涯が終わつたところに、始まりがあります。親鸞聖人の

ご遺族、そして教えを受けたご門弟の方々が、まず最初に何を始めたのかというところ、仏事を始めたのです。90年のご生涯が終わって始まったのが仏事だったのです。

仏事と法事は同じことなのか、違うことなのか、どうでしょうか。一般的に言えば法事とは年忌法要のことを言います。仏事とどう違うのか、実はこの法事は仏事と同じ意味なのです。年忌法要も仏事です。ですから何が始まったのかというと、「仏法の事」が始まった。仏法が始まる。親鸞聖人が亡くなって、遺された人たちが「南無阿弥陀仏」の仏法の教えに、改めて出遇っていくことが始まる。そういう意味を持っているのです。亡くなった人の法事だと私たちは思いますけれども、同時に遺された人たちのためにある仏事・法事、仏法の事と言っていいと思います。

親鸞聖人が亡くなられて、月命日のお参り、七日七日の中陰のお参りがなされたのでしよう。そして最初の祥月命日が一周忌、そして月命日が続き、三回忌、七回忌と勤めていったのです。そして三

十三回忌の時に、親鸞聖人のひ孫にあたる覚如上人の『報恩講私記』に由来して、毎年の月命日のお勤めを報恩講と名付けられたのです。その書物の中に「流を酌んで本源を尋ぬる」(『真宗聖典』73頁)とあります。つまり報恩講とは、「流を酌んで本源を尋ぬる」儀式。それが仏事だと、それが法事だと。私たちの親たちの法事も、「流を酌んで本源を尋ぬる」儀式です。あらゆる行事が「流を酌んで本源を尋ぬる」儀式なのです。それが報恩講という儀式の、あらゆる真宗の儀式の精神です。

そしてその報恩講が、本当に報恩講になっているのか。「流を酌んで本源を尋ぬる」という報恩講になっているのか。ここでこうして親鸞聖人のもとに集う、私たち一人ひとりに厳しく問われているのです。

終わりにふれる

親鸞聖人が出遇った「南無阿弥陀仏」

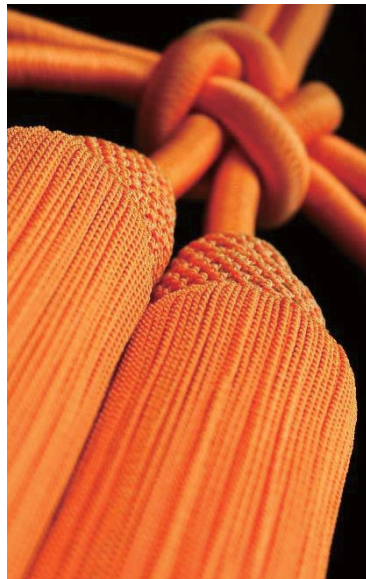
の本源。言葉を変えれば根本・根源。私はどういう存在なのか、人間とは何なのかという根本・根源。そして私たちが死を受け止める、老いを受け止める、病を受け止める、様々な出来事を受け止める私の心、私の思い、その根本・根源。そういう事を終わりをとおして、つまり死をとおして尋ねることが、私たちにとつて、とても大切な事であるとして、お示しくださっているのです。

終わりにふれる、つまり死者に向き合う時、私たちは自分もいつかは死んでいかなければならない、限られたいのちだということを自然に尋ねさせられてきます。人間の存在の事実です。普段は老いとか、死んでいくとか、病とか思いたくもない。人間関係もそうです。できれば楽しく仲良くやっていきたいのです。健康で長生きして、お金も困らないで生活していきたいと思うのが私たちです。これが私たちの思い通りにしたいという気持ちです。

では、思い通りになるかというところ、うはいきません。身近な方が病気になるたり、老いということが、いろんな負担

になつたりします。そして最後は死んでいかなくてもならない。人間関係も、今日は良くても明日はわかりませんし、今日すらもわかりません。お仕事も経済的なこともそうです。私たちはどうなるかわからないのちを生きているのです。何でも思い通りにしたいと思っても、思い通りになりません。人生は自分の思っているようには決してならないのだ、ということはどこで知るか。その象徴的な出来事が死です。死の眼差し、終わりからの眼差しです。生きることを生きるという視点で見る限りは、生きること

して、改めて人間の存在そのもの、私たちの思いそのもの、さらには、その亡き人とのつながりそのものが、どうだったのかということが、深く尋ねせしめられていくのです。



は自分の思い通りにしたいということにしかありません。しかし、その生きていくことには死がある、限りがある、終わりがある、というところから人生を見ると、思い通りにならない事実を知らされます。そして老いてもいくし、病にもなる。人間関係もどうなるかわからないような在り方を、私たちは生きています。いつもはあまり意識しない身の事実を、身近な人が亡くなると、生きていることの事実そのものを尋ねせしめられるのです。つまり、終わるといふことをとお

生の本源を見つめる世界を開いてきます。そこに本当の始まりがあります。実はそれが「南無阿弥陀仏」の本源なのです。

「出あい」

とくろいよ

本日感話を頂いた林栄美子さん（東京2組林光寺門徒）のお話は、今回のテーマにかなった内容の感話でした。教区報恩講のサブテーマは「一人にであう、教えにであう、自分にであう」です。林さんのお母様は親鸞聖人の「南無阿弥陀仏」の教えに出遇っておられました。そしてそのお母様とおして、林さんは教えに出遇っていかれたのです。

私たちが親鸞聖人のご縁をいただいているのは、教えに出遇っている人に出遇うということがないと、出遇えないのです。その教えに出遇い、その教えに生きている方々の姿や言葉に出遇う。そ

ここに自分の生き方や自分の考え方が足元から翻されていくような、思いを超えて聞こえてくるような世界をいただく、それが「南無阿弥陀仏」の教えとの出遇いです。

その教えに遇うには、諸仏に遇わなければ遇えないということです。諸仏とは、私たちに先立って親鸞聖人の仏教、「南無阿弥陀仏」の教えに出遇い、その教えに生きられた方々のことです。それを諸仏という言い方をします。その諸仏に遇い、そして、その諸仏に遇ったことをとおして、その教えに自分も遇い、自分自身の生き方や在り方を尋ねていく。

もつと言えば私たちの考え方や在り方が、さまざまな問題の渦巻く時代社会を作っているのです、私と出会うということは、私の生きていく課題や問題に出会い尋ねることであり、同時に時代社会の課題や問題にも出会い尋ねることになるのです。林さんの教えとの出遇いは、お母様のお念仏の声から始まったのではないのでしょうか。ナンマンダブツ、ナンマンダブツとお念仏を称える。お内仏の前で「正信偈・和讃」をお勤めして念

仏申す、そのお姿です。

親鸞聖人が『教行信証』行巻の中で、念仏を称えるということをも、「大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり」(『真宗聖典』157頁)と、おっしゃいます。無碍光如来とは「南無阿弥陀仏」です。称すること、そこに主語がありません。「誰が」がない。実は「誰が」とは諸仏です。諸仏の念仏を聞く。今の林さんの感話の中で言えば、お母様の念仏。それが諸仏の念仏です。



食事の前後の「いただきます」「ごちそうさま」も、親がしなければ子どもはできません。お内仏にお参りすることも、お墓にお参りすることも、これは親や先輩たちがしていないと、できないのです。相続されないのです。この形の相続は大

事なことです。お莊嚴の相続です。それはわかる、わからないを超えて、私たちに与えられているものです。そのことが将来、聞法の縁となり、それによってその形がどんな意味を持つのか、「南無阿弥陀仏」とは、どんなおこころなのか、ということが一人ひとりに明らかになっていくのです。形の大切さです。その形の象徴が「南無阿弥陀仏」です。

念仏は理屈ではありません。響きです。そしてそのおこころを、本当に頂いていかなければ、単に幼少の頃のノスタルジィになったり、教えに出遇っているはずなのに、念仏に酔っていたり、自分を強くするための道具にして、周りを支配分断させていくことにもなりかねないのです。また念仏申すことが、善根功德を積むという意識となってしまう、「南無阿弥陀仏」と称えさえすれば、救われる、たすかる、そして極楽へ往生できると、親鸞聖人以前の浄土教のようになってしまう。今も真宗以外はそういう理解です。そういう浄土教と訣別して、本来の浄土教に還っていったのが法然上人、親鸞聖人なのです。

「聞く」と「願う」と

称名念仏しょうみやうと言います。称名は聞名です。「無碍光如来の名を称する」、林さんもお母様の念仏の声を聞かれたのでしよう。聞名です。その名を称える。名と云うのは、「南無阿弥陀仏」六字名号。お釈迦様が「南無阿弥陀仏」とおっしゃっていません。「南無阿弥陀仏」は伝わっていない。法然上人が、「南無阿弥陀仏」とおっしゃっていません。「南無阿弥陀仏」は親鸞聖人に伝わっていないでしょう。

「南無阿弥陀仏」と、まず声にする。先ほど皆さんでお称えました。この会場のすべての人に、その声が聞こえますね。「名声聞十方」です。東西南北と、その間を加えて八方、さらに上下を入れて十方。『正信偈』の「重誓名声聞十方」です。すべての人に聞こえる、聞こえて欲しいという願いが、この「南無阿弥陀仏」のころころなのです。十方に聞こえて欲しいということは、一人ひとりに届いて欲しい、一人ひとりが出遇って欲しい、と

私たちが願われているのです。その願いを「本願」と言います。

本願と「南無阿弥陀仏」の名号は一体です。ひとつです。「南無阿弥陀仏」の中心が願いです。本願名号と言います。だから阿弥陀という名は願いなのです。「南無阿弥陀仏」と念仏申すことは、願いを聞き、願いに生きることなのです。ではその願いとは、どんな願いなのか、ということをおぼろげに聞かさせて頂く、それが聞法です。そこに私たちが深く知らしめられる。自分の能力で聞くのではない、能力だったら頭がいい人しか聞けない。頭が良いとか悪いとかではない。自分の人生を生きてきた実感の中で、苦しさ、悩み、悲しみ、痛み、辛さ、そういう状況の中で聞こえてくるものがあるのです。それが頷きです。それを「信」と言います。聞いたのではないのです。聞こえてくるのです。だから『正信偈』に「聞信如来弘誓願」と示してあるのです。

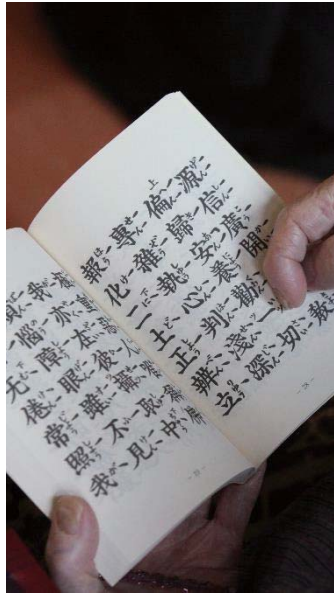


お経の「聞く」と「願う」と

そしてお経の最初に「如是我聞」という言葉があります。『大無量寿経』は「我聞如是」となっています。『観無量寿経』『阿弥陀経』は「如是我聞」です。同じ意味です。お釈迦様のお言葉を私はこのように聞きましたということ。お釈迦様が書かれたものはありません。お釈迦様がお話しされた内容を、お弟子さんたちが聞いて文字として残しました。それがお経です。

あるご住職が中国からの留学生に、「如是我聞」とはどういう意味ですかと尋ねたら、「私はこのように聞こえてきました」という意味です」と答えられたそうです。「私が聞いた」のではない。「仏の方より」と蓮如上人はおっしゃっています。向こうから仏の願いが「南無阿弥陀仏」のお言葉をとなつて、私たちに呼びかけ、問いかけ、届いてくるのだと。では、その願いとは具体的に何か。何が聞こえてきたのか。なぜ問いかけなのか。その願い、本願は悲しみです。悲しみ

をもつて私たち一人ひとりに願いをかけてくださっているのです。一人ひとりが悲しまれているのです。大悲と言います。大悲の本願です。大悲の願いに出遇い、そのこころを聞かせていただいたということが、親鸞聖人の深い深い領きであり、恩徳です。「如来大悲の恩徳」です。私たち一人ひとりが、如来の世界から悲しまれているのだと。私たち人間が、私自身が悲しい存在だということが聞こえてくるのです。



そして『教行信証』信巻に『真実』というは」と示し、続いて『涅槃経』を引かれて『真実』というは、すなわちこれ如来なり。如来はすなわちこれ真実なり」（『真宗聖典』227頁）とおさえておられます。『教行信証』の正式な題名が『顕浄土真実教行証文類』。顕浄土真実と

は、「浄土が真実であることを顕かにし顕す」ということであり、あるいは「浄土という表現をとおして、真実を顕かにし顕す」と受け止めることもできます。つまり阿弥陀、浄土という言葉も、お荘嚴の形も、何を私たちに伝えたいのか、それは「真実」です。言葉を替えれば「本当」ということです。

「本当」とは何か

安田理深先生は「本当のことがわからないと、本当でないものを本当にする」。それが私たちの在り方だとおっしゃっています。つまり自分は間違っていない、自分は正しいと思っているなら、自分の考えや思いを本当に行っている、真実にしているということでしょう。

「三帰依文」に「如来の真実義を解したてまつらん」とあります。如来が真実なのです。經典には阿弥陀さんがどこかにあるかの如く、浄土がどこかにあるかの如く表現されていますが、それは私た

ちに大切なことを伝えるための物語、譬喩なのです。無上方便です。浄土の世界は物語として神話的に表現されていますが、実は「真実」を伝えるために、そういう表現がなされているのです。

『正信偈』に「本願名号正定業」とあります。正は「真実」。定は「定まる」。業は平たく言うならば「生業」、つまり「生活」ということです。「念仏が浄土へ生まれるための正しい行為」というのが本来の意味ですが、もう少しそれを砕いて言うならば、「本願の名号を称え聞きいただくとき、真実にふれて私たちの生活が定まってくる」ということです。本当にふれると「私が正しくなる」ということではありません。正しいことにふれて私の生活が定まる。「本当でないものを本当に行っていたのではないか?」、「どこかに間違いがあるのではないか?」と問われ定まってくる。

つまり自分自身を見つめ返す世界をいただくということが、定まることなのです。自分にとって善いか悪いか、得か損か。自分の中に善悪の基準があります。すべてのことがその基準に従って無意

識に考えて行動していません。それが人間でしょう。それを「凡夫」と言います。凡夫に定まるといふことでしょう。『正信偈』で言えば「一切善悪凡夫人」です。真実に目覚め、凡夫の自覚が願われているのです。だから聞いて欲しい、如来の願いに出遇って欲しい。「南無阿弥陀仏」も『正信偈』『和讃』も呪文ではない。私たちに真実を伝え、自分の姿に目覚めて欲しいという弘く誓われた願いです。そのことを続いて「聞信如来弘誓願」と示してあるのです。

そしてその真実を光で表します。「無邊光」です。『正信偈』には「普放無量無邊光」とあります。浄土の光、浄土の世界は、十二光の一つである「無邊光」の世界です。辺がないのです。辺が無いとどうなりますか。辺という四方の枠があると、中心・辺境、そして序列が必ず生まれます。私たちの善悪の意識作用、つまり心が作る世界です。辺が無いと、中心と辺境、序列も消える。どこでも中心。その中心によって世界が成り立っている。つまり、一人ひとりが中心。そして一人ひとり、お互いが支え合って成り

立っている。

それが真実です。善悪を超えた世界です。本当ということですが。一人ひとりが誰でも尊重されて支え合っているのがいのちです。私たちの「存在の本来」がここにあります。その「本来」を私たちは善悪の心で枠を作って見えなくしているのです。

それが煩惱です。『正信偈』に「煩惱障眼雖不見」と示されています。本来も見えないし、その枠を作っている私の心も見えない。「いのちが私を生きている」のです。なのに私たちは自分の心で自分を生きていると無意識に思っている。煩惱で枠を作って、その中で生きている、だから見えない。「煩惱障眼雖不見」だけど、その姿を悲しまれている。「大悲無倦常照我」。大悲の願いにいつも私が照らされている、願われているのです。

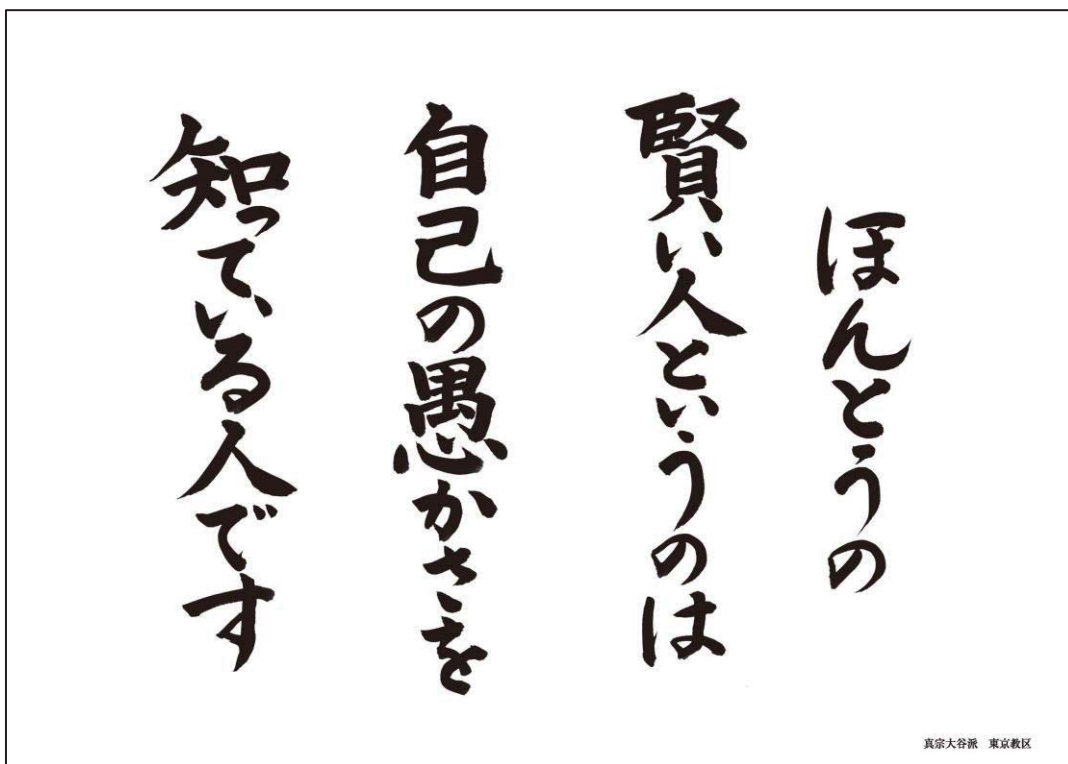


報恩の感覚

『正信偈』にもう一カ所「大悲」があります。「應報大悲弘誓願」です。大悲弘誓は大悲の本弘誓願です。だから大悲の願、悲しみをもって私たちに願っている世界に出遇う時、出遇って良かったという恩を感じさせられるのです。「應報」の報は、報恩の報。「弘誓願」。「恩」は報恩の恩。「應」は応える。その願いに生きていくことが「應報」。報い応える。そういう生活が開かれてきたという実感が、「恩」という感覚です。それは、人と出遇い、教えと出遇って、自分自身の姿と自分自身の本来に目を開いていく、そういうことが培われて私たちに届けられてきたのが報恩講であり、浄土真宗のお寺です。

その世界を私たちは失っているのではないか。本当に報恩講になっているのでしょうか。「忘恩講」でしょうか？あるいは、恩に背く「背恩講」。でも、そのくらいの問いは、私たちの中にあってもいいのではないのでしょうか。

今月の法語



- ・頒布中「掲示伝道用ポスター」(A2 サイズ)
「掲示伝道ポスターミニ」(ポストカードサイズ)
- ・「掲示伝道用ポスター」が貼れる門徒宅用掲示板を無償設置いたします。
詳細は東京教務所まで。



帰敬式法話

〔1月26日〕

中津功氏なかつ いさお（親鸞仏教センター）

本日は60人の真宗門徒の方が法名を頂き、仏弟子の誕生という現場にお参りさせて頂きまして感銘一入のものがありません。私は大谷大学在学中に髪を剃そって、お得度を受式しました。次の日、大学で友人に会うなり「中津くん、おめでとう」と言われて私は驚きました。考えてみますと、本当の意味でおめでとうなんです。良くぞ親鸞聖人の教え、阿弥陀の本願の教えに生きようと決心できた。また、その決心を根底から押し上げてくださった恩恵、恩徳に感謝する尊い日なんです。今回の副題に「人にであう教えにであう自分にであう」とありますが、私は幸いにもよき人々に出遇あうことができました。出遇いによって自分自身が何という大事な人生を頂いたのか気づくのです。親が勝手に私を生んでくれたと思っていたのが、よき人、よき教えに出遇うと、良くぞ私を生んでくださったと大逆転するのですね。

『歎異抄』の初めには、「耳の底に留まるところ」と書いてありまして、耳の底に留まるのですから、記憶している程度のもではない。人間の生き方の根底にまで染み通っている。言葉を変えれば、この言葉に遇わなければ自分の人生はどうなっていたかわからない。という程の言葉であると思います。私たちは教えに遇う時、身命を顧かえりみずに尋ねていかれた、尋ねずにはおられなかった、そういう方々の「御ころさし」、ご苦勞を絶対に忘れてはならないと思います。

人間にとって本当に悲しいことは「空過」、空しく過ぎるといふことではないでしょうか。物質的にどれほど便利な社会になって来たとしても、その人生が欲望に追われて、快樂むさばを貪むさばることに追われて空しく過ぎるならば、それは充実感のない淋しい人生ではないでしょうか。我々は流されて空しく終わって良いとは絶対に言うことはできない。

金子大榮先生の言葉に「完全燃焼する人生」という言葉がありますが、生き尽くして、死んでいくことができる。そういう人生を生きさせて頂きたい。練馬のこの地で、宗祖親鸞聖人の報恩講にお遇いさせて頂くことは大変に得難く、尊く、感銘深いことでもあります。



晨朝法話「1月28日」

藤井 義信 氏ふじい よしのぶ（長野5組専念寺）せんねんじ

「ご法事は何のために勤められているのでしょうか。「南無阿弥陀仏」という、その念仏が「私の思いを念じている」ということになっていないでしょうか。その心の根っこにあるものが得や楽を求めるといった、自分にとって都合の良い手立てのお念仏であるのなら、私たちの日常と何ら変わらない自分の都合の為だけの存在になってしまいます。今日の仏事、お参りの中心には阿弥陀如来が立っておられます。親鸞聖人は、亡き方を通して遺された私たちに「念仏する身になって、たすかる身になってください。念仏してください」とお勧めしてくださっています。その世界に気付くご縁を頂く仏事が、この報恩講です。私たちの毎日というのは、思い悩むこと、解決のつかない何とも言えないようなしこりを持ちながら、一生懸命に生きています。それが私たちの生き方だと思えます。亡くなつて初めて今まで知らなかった親

の姿に出会い、私がまた育てられる。また幼くして亡くなった我が子の命を、親は悲しいだけの存在にしてしまうのか。この子がこの私の下に生まれてきてくれて、私を親としてくれたその子に恥ずかしい姿は見せられないという思いの中で生活が始まるのであれば、それは亡くなった子に育てられ続ける親となるのではないのでしょうか。だから死は終わりではなく、その意思を継ぐ人にとつては始まりなのである」と、私は聞きました。海法龍先生も、昔は葬儀を「お甲い」と言っていたと仰っていました。古くから「訪う」という字で、足を運んで、大事なことを教えて頂いた方に訪ねに行くということでした。

念仏というのは、自分の都合でしか相手を見られない眼まなこや生き方から解放される道を教えてくださいます。だから葬儀、仏事において亡き方を自分の思いで勝手に眠らせてはならないと思うのです。私を呼び覚ます「南無阿弥陀仏」の念仏としてはたらき続けてくださっています。私に呼び掛けられていると手を合わせた時、亡き方が諸仏として、そして「南無阿弥陀仏」として私たちに届いてくる。それは親鸞聖人、大切な亡き方、そして阿弥陀如来に出遇える御仏事なのです。

**混声合唱団
TOKYO
サンガ9**

団員募集中

仏教讃歌の混声合唱団です。
定期的に練習し、教区報恩講、
教区同朋大会、その他演奏会で
披露しています。
お問合せ、入団希望の方は、下
記までお気軽にご連絡ください。

♪お問合せ♪
〒177-0032
東京都練馬区谷原1-3-7
Tel 03-5393-0810
東京教務所(担当:渡邊誉・渡邊楽)

**児童教化連盟
じれん**

参加者・スタッフ
募集!!

春の遠足・夏のキャンプ・子ども報恩講を開催しています
また、児童教化に関する研修会(年2回)も行っています
お子様のご参加、スタッフとしてのご参加をお待ちしています

詳しい活動は
←QR (facebook) を
ご覧ください

お問合せは児連事務局まで

〔東京教区児童教化連盟 事務局〕
〒130-0012
東京都墨田区太平2-7-1本明寺内
Tel 03-3623-1536
委員長 本田彰一(東京1組)
✉tokyojiren@gmail.com

2020年真宗大谷派東京教区 親鸞聖人につどう

同朋大会 開催中止のお知らせ

2020年6月3日（水）に予定しております
東京教区同朋大会につきまして、開催に向けた取
り組みを行ってまいりましたが、このたびの全国
的な新型コロナウイルス感染症の感染拡大、また
東京教区内での感染拡大の状況に鑑み、**中止の措
置を講じることとなりました。**すでに参加をご予
定されておられました皆様には誠に申し訳ござい
ませんが、諸事情をご賢察のうえ、何卒、ご理解
賜りますようお願いいたします。

東京教区同朋大会企画会チーフ 堀 秀隆
東京教区教化委員長 藤田 哲史

お問い合わせ先：東京教務所（担当：渡邊楽） ☎03-5393-0810

教区教化通信 教学館

私が出遇った言葉

千葉組 即隨寺 長尾 朋聡



いずれ全ての病院に臨床宗教師がいるように

鈴木岩弓先生に「イエエ亡き時代の死者の行方」という講題で話をして頂いた。鈴木先生

が言うイエエ亡き時代のイエとは、建造物(House)でも家族(Family)でもなく、超世代的に存続される制度を指している。そのイエが亡くなった内実を西田眞因先生は「アイデンティティと抛り所の喪失という問題」だと押さえられた。イエは人を包み込み安心感を与え、また人はイエに依って生き死んでいくことができたのである。現代人はイエが喪失した不安と孤独の闇の中で自らの死後を考えて時に、代わりのイエを求めるかのように各々が自分の思考に合った合同墓地に入ることを望むようになった。だが果たしてそれでは亡くなっていけるのであろうか。私はイエエ亡き時代だからこそ、改めて自らの存在や何を抛り所に生きているのか、亡くなればどこへいくのかが問われてくるように思う。そ

の事が最も問題となるのが自らの死と向き合う臨床の場と言えよう。

鈴木先生は臨床宗教師に必要な素養を2点挙げる。それは傾聴と生を突き抜けて死後世界を語れることである。傾聴は宗教者として最も大切な事であるが同時に非常に難しいことでもある。殊に臨床宗教師には、自己の信仰の保持と他者の信仰に寄り添う寛容性が求められる。鈴木先生はその寛容性を幅と表現されたが、各宗教者自らの信仰という軸がしっかりとしていなければ幅は生まれないと思う。その軸こそが死後世界を語れる程に自らが還る世界を感う事なく持つているという事であり、それが臨床の場に安心感を与えるのだと思う。その安心感は宗教者自身が還る世界、言わば宗教というイエに包まれていることから出てくるのであろう。つまり求められるのは臨床の場で死後世界を語るというより

も、還るイエを持つ者の安心感である。そこに傾聴と死後世界を語れることに矛盾がなくなる。そして、自らの信仰の軸があり、且つ自らの信仰を押し付けずにきちんと傾聴し寄り添えた時にはじめて臨床の場が人間の生死について共に考えていける場となりうるのだと思う。

臨床宗教師が宗教というイエに生きつつ傾聴を通して人に寄り添い、何を抛り所に生き亡くなったらどこに行くかという問いを共に聞思する場が病院で開かれるようになることが、鈴木先生が懇親会の席で優しい笑みを浮かべながら語った「いずれ全ての病院に臨床宗教師がいるように」という社会が実現した際の具体相になればいいと私は思う。

第13回 教学館月例研修会

2020年2月5日～6日

基調講義：眞宗原論

・阿弥陀佛と知の被限定性の臨
界点に立ちての私論

西田 眞因氏 (元教学研究所所長)

特別講義：「イエエ亡き時代の死者の行方」

鈴木 岩弓氏 (東北大学名誉教授)

同総長特命教授

教学者は「是旃陀羅」問題に己の血を流せ！④

「同和」協議会会長 岩寄徹

※3月号の続き(全5回1-4)※

『教行信証』後序によれば、「僧儀を改めて姓名を賜うて、遠流に処す。予はその一なり。

しかればすでに僧にあらず俗にあらず」と言っている。「僧儀を改めて姓名を賜うて」ということは、僧というものも俗というものも、その両方が国家或いは天皇(上皇)によって規定されているということを表している。従ってそういうところには親鸞はいないという意味で、非僧非俗なのであり、国家或いは天皇(上皇)によって規定されていないところが、上記に説明した禿人^{とくじん}であり禿首^{とくしゅ}の者なのである。そういうことで親鸞は、「禿」の字をもって姓とす」と言ったのである。

つまり、親鸞は国家或いは天皇(上皇)に

よって規定されたところから離脱したということであり、禿人であり、禿首の者であるとい

う、すでにして離脱している人々の中に親鸞は入っているということなのである。そういうことでは、親鸞が「禿」の字をもって姓とす」ということは、親鸞自らの賤民宣言であると言っても良いと思う。ここで誤解して欲しくないのは、親鸞が賤民の名を名乗ったのではなく、親鸞が賤民であったということである。ここを間違えると、「親鸞はりよし・あき人をわれらとした」という、よくある台詞になるのである。普通に考えてみれば良く解ることだが、賤民でもない者が、賤民をわれらとすると、何のことやら良く解らん。そんな解らんことを平気で語って来たのが教学者なのだ。そしてそういう教学

者が「是旃陀羅」となると口をつぶるのだ。

ところで、親鸞仏教センター(以後センターと略す)は、その著作『現代語 唯信鈔文意』(朝日新聞出版)に於いて、「りよし・あき人、さまさまのものは、みな、いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり」を解説して、つまり、「りよし・あき人」といっても、特殊な人を特別に取り上げているのではなくて、あらゆる人は煩惱に縛られたる「われら」なのです。能力で見れば、確かに出来・不出来はあるけれども、「人間存在」ということでは、誰一人として「煩惱具足の凡夫」から外れる者はいない。そのことを教示するために、たまたま「りよし・あき人」が挙げられただけで、親鸞が伝えたかったのは「どんな人であっても」ということ、それが「さまさまのもの」という言葉で表現されている。(本文162頁)

※5月号へ続く※



ありがとうの思いを伝える

小木津聖徳保育園は、茨城県北部（高萩市・日立市）に5つの保育園を展開している聖徳グループの一つであり、「家庭と子どもにやさしい保育園」をモットーに、ニーズに合わせた教育を行なっています。当園は、日立市の北部に位置し、近くには小木津山自然公園があります。小木津山自然公園は、昭和46年4月に市民の憩いの場所として開設され、スイレンの池があったり、アカマツの自然林、ナラ・クヌギの雑木林の中には遊歩道があったりと、気軽に森林浴が楽しめる場所です。小さな



子どもたちにとっては、憧れの散歩コースであり、大きい子達にとっては、楽しく遊べる魅力的な公園です。

小さな子と大きな子が手をつないで散歩をするとき、大きな子は少しゆっくり歩きながら小さな子を守るように歩き、小さな子達は、つないでもらった手をギュッと握って、頑張って歩きます。その姿を見ると、普段の生活の中でお互いを思いやる気持ちが育ってきているのを感じます。お互いを思いやる気持ちは、様々な場面で見られます。例えば、お昼寝から起きた時の布団を片付ける場面です。未満児クラスでは、保育士がたたんで押し入れに片づけますが、2歳児クラスの終わり頃には子ども達が片付けるようになってきます。ひとりで運べる子もいれば、なかなか運べない子もいます。初めは保育士が手伝いますが、徐々に、その姿を見ていた子が友達を手伝うようになってきます。子ども同士、「てつだって」という声も出るようになってきました。友達が困っていることに気がついて手伝うことと同時に、困ったときに、自分から「てつだって」と言える関係は、お互いを思いやり、相手に「ありがとう」という気持ちを伝え合うことで育ってくるのを感じています。

社会福祉法人 聖徳会

小木津聖徳保育園
(茨城県日立市)

主任補佐保育士 舟生美香



教区 組ぞの現場から

東京1組

住職寺族研修会

報告 内藤友樹（光桂寺）

本年2月12日、組内の住職寺族を対象とした研修会が開かれた。今回の研修は、昨年3月6日に開かれた研修会の「宗名事件を学ぶ」をテーマで引き続き行われた。講師には千葉県文書館より芹口真結子氏をお招きし、また前回の講師である教学研究所の松金直美氏にもコメントーターとしてお越し頂いた。

講義は、宗名事件（江戸時代に宗名をめぐる浄土真宗と浄土宗の間にあった論争。宗名論争ともいう）を当該期の政治状況（安永期…田沼意次政権、天明末…松平定信政権）とリンクさせつつ、東西本願寺・増上寺による対幕府交渉と浅草有志寺院による運動の特質を検討するという目的のもと行われた。

宗名事件を政治動向の一つと位置付け、これまであまり用いられることのなかった史料をもとに考察していくという新たな視点からの講義であった。宗門内においてこの問題が

取り上げられる機会は極めて少ない。そうした中、どうしても一方からの視点になってしまう本テーマへの向き合い方を改めて考えさせられた。

宗名事件を学ぶ上で、江戸時代に宗名（浄土真宗としての公称を求めた意義とは、そして本来の意味とは何か、現在、当たり前のように宗名として浄土真宗と公称している在り方について順をたどりながら考えていく必要があるのではないだろうか。

また、そうして学んでいく中で多くの人の出会いがあり、その出会いの中から新たな発見がある。芹口真結子氏の講義はそのように思わせてくれる素敵な講義であったと私自身感じていた。

最後に歴史の一端を受ける東京1組として、今後もこの問題を深く学んでいき、また広く世に発信していけたらと考えている。



芹口真結子氏…1988年埼玉県生まれ。2010年日本女子大学文学部史学科卒業、2012年一橋大学大学院社会学研究科総合社会科学専攻修士課程修了、2017年一橋大学大学院社会学研究科総合社会科学専攻博士後期課程修了、2019年千葉県文書館嘱託職員着任、現在に至る。博士（社会学）一橋大学。

はい！こちら真宗会館です

駐	在
日	記

駐在からひとこと
 新型コロナウイルスの感染拡大により、
 世間では不安が増大している。
 その状況下でお寺は何ができるのだろうか。

写真：New！教区災害救援備蓄品「発電機」



東京教区駐在教導
 佐々木 弘明

「ランチタイム」

先日、浅草近辺で午前中からの会議を終え、委員の方々と昼食をとりファミレス「ジョナサン」に向かった。

普段ファミレスに行く機会はほとんどないので、和洋中の料理が写真入りで掲載されているメニューを開くと、どの料理も魅力的に見えた。どれを注文するのか迷ったあげくに、お得な「お昼のジョナ得セット」（メインディッシュ・サイドメニューを数種類から選び、さらにスープ・ドリンクバー付）を注文した。

食事を終え、外に出ると、ファミレスののぼり旗が目にとまった。そこには、「ランチメニュー17時まで」という文言があった。17時はランチタイムではなく、ディナータイムに入っているのではないかとふと思った。

そもそもランチタイムが何時から何時までなのかということ考えたこともなかったが、11時から14時頃ま

でという感覚が私にはあった。しかし、それは私自身の生活が、ウィークデーは、朝9時に出勤し、12時には昼休みがあり、17時30分には退勤し、帰宅して夕食をとり、寝る、というリズムがあるので、12時にはランチという感覚になるのであり、例えば、夜勤をしていたり、早朝から仕事をしている方々にとっては、12時近辺の時間がランチタイムにはならないのではないだろうか。

夜勤の方にとってのランチタイムは夕方なのかもしれないし、早朝から仕事をしている方にとっては、午前中なのかもしれない。一人ひとりにそれぞれの生活のリズムがあり、多くの方々の生活リズムに対応した答えが「ランチタイム17時まで」ということになったのかもしれない。

様々な時間感覚で生活する方々がいる中で、お寺という場も変わり続けていかなければならないのだろう。

はい！こちら真宗会館です



東京教務所次長
北島 昭彦

担当：東京教務所事務全般の管理及び整理
よく見る番組：麒麟がくる（大河ドラマ）



毎年、暖かくなってくるとマスクが手放せなくなります。私の自坊は山間部で、四方を山に囲まれ、境内には大きな杉の木が何本もありますが、自坊で生活していた頃は花粉症で悩むことはありませんでした。しかし、10年ほど前から目が痒くなり、かゆみで夜中に何度も目が覚めたり、鼻水・鼻づまりといった症状が梅雨頃まで続くようになりました。今年も花粉症との戦いが始まりました。

さて、3月11日は東日本大震災が発生した日で、今年で9回目の「3.11」を迎えました。私は震災後の10月に岐阜教務所から仙台教務所へ異動となりました。毎日、全国各地から多くの方がボランティア活動のため、被災地（岩手県、宮城県、福島県）に足を運んでいただいたことを今でも感謝しております。中には活動用の車ま

で寄贈いただいた教区・組もありました。人の温かさ、有り難さを心から感じたことです。本当に有り難うございました。

以降、毎年3月11日には、「決して忘れない 震災を心に刻み、犠牲者に思いを馳せ、復興と支援の思いを繋いでいく」という願いのもと、全国各地で「勿忘の鐘（わすれなのかね）」をつき、法要を勤める呼びかけがなされています。

「いつ、どこで、だれに起こるか分からない」という中で起こった東日本大震災を、私自身は自分のこととして受け止めているのだろうか。毎年3月になると自問自答している私がいいます。そして4月になると忙しさに流され、忘れてしまうのです。誠に情けない限りです。

「目読」ではなく
「耳読」の味わいを

録音図書 聞いてらっしゃい



『阿弥陀経に聞く』連載中

暮らしにじーん

検索



スマホやパソコンでぜひアクセスを！東京教区のホームページ

暮らしに
じーん



www.ji-n.net

検索 暮らしにじーん

お寺をもっと身近に

多彩なコンテンツ

- じーん散歩 **New**
- しんらんさまめぐり
- 法話／行事・講座
- なるほど仏事作法
- 寺院検索
- 他

こちらのお寺も載っています！



スタッフ募集

パソコン技術は不要です

ホームページ班のメンバーは僧侶に限らず、月に約1回のペースで集い、アイデアを出し合ったり、時には現地取材もしています。ぜひ一緒に活動しませんか？（お問合せは教務所/玉井まで）

2月敬弔

岩倉早苗 様

長野3組 西敬寺 前坊守

2月10日命終 70歳

安田晃菟 様

長野1組 常福寺 前住職

2月17日命終 87歳

生前のご功労を偲び、
念仏合掌して哀悼の意を表します。

人事異動

着任

芝原 悠理

首都圏教化推進本部法務員

(2020年3月1日付)

涌

編集員の随筆



1月下旬、生まれ故郷である新潟県長岡市が全国版のテレビニュースで取り上げられていた。画面に駅前の様子が映し出されると、懐かしさを感じると同時に、言い知れぬ違和感に包まれた。あれ？何かがおかしいゾ…。一瞬の間をおいてはつとずる。

雪が無い。少ない、ではなく皆無なのだ。暖冬とは聞いていたが、仮にも豪雪地・長岡だ。例年なら、あちらこちらに雪がうず高く積み上がり、幹線道路には融雪用の地下水を絶え間なく放流しているはずなのだ。

この冬は記録的な暖冬の影響で、日本海側を中心に、極端に降雪量の少ない状況が続いていた。全国的にスキー場の稼働率は著しく低く、各地で恒例の雪まつりが次々に中止となった。また、雪解け水の減少による深刻な水不足も懸念されている。

新聞に「少雪災害」という、聞いたことのない熟語が出てきて驚いた。記事の中で、長

岡市内で除雪作業を請け負う会社の経営者が「降りすぎれば災害だが、まったく降らないこともまた災害。我々にとっては大打撃」と吐露しているのが心に残った。

2千5百年前、マガダ国の太子・阿闍世は近隣諸国に倣い、商業中心の社会を目指していた。そして仏教に帰依した父王・頻婆娑羅が推進してきた農業中心の社会のあり方を、「予測できない天候に左右される非効率的な仕組み」とすると否定し、この対立はやがて「王舎城の悲劇」に繋がっていったという…。

私は農家の生まれではないが、稲作の盛んな長岡という土地に、必ずしも「晴れ〓良い天気」ではない、という肌感覚を育まれた。異常気象が「平常」になりつつある昨今、それぞれが置かれている状況や立場によって天気ひとつ、その良し悪しがバラバラなのだ、改めて知らされてくる。

(東京8組 究竟寺 田宮 真人)